

# 広島の「医学の歴史」を学ぶ



身幹儀(星野木骨) ※レプリカ  
等身大の成人男子の骨格標本。舌骨、耳小骨を除き小さな指の骨まで非常に精緻に作られている。頭蓋の内部もほぼ正確。(国の重要文化財)



『解体新書』初版本  
オランダ語の解剖学書を杉田玄白らが翻訳。序図1冊と本文4冊から成っている。



ふじかわ ゆう  
富士川 游 肖像画  
近代日本の医学史研究を確立したと言われる。このほど肖像画と書簡などが医学資料館に寄贈された。



2階展示室には医学部をはじめとする霞キャンパスの学部・研究所の資料が展示されている。

## 広島で作られた 日本で初めての骨格標本

展示室の奥、ガラスケースの中に立つ人体の骨格模型。これが、国の重要文化財に指定されている「身幹儀」です(展示はレプリカ)。江戸後期、広島生まれの医師・星野良悦が工人・原田孝次に作らせた日本最初の木製骨格標本で、通称「星野木骨」とも呼ばれています。旧広島藩の藩医・後藤家から寄贈されました。

良悦は木骨を江戸に持参し、『解体新書』を著した杉田玄白たちに披露しました。彼らは『解体新書』の図と木骨を見比べて、その正確さ、緻密さに驚嘆し「身幹儀」と名づけたと言われます。

その『解体新書』の初版本も、医学資料館に収蔵されています。さらに、医学史研究の道を拓いた医師・富士川游の資料や江戸中期の漢方医・吉益東洞の像など、広島の医学の礎を築いた先人たちの資料も。

静かな医学資料館展示室ですが、目をみると、広島の、いや日本医学の素地を築いた当時の医師たちの息づかいが聞こえてきそうな気がします。

## 赤レンガ造の11号館が 資料館としてよみがえった

広島大学医学部に、国立大学医学部としては全国で初めての資料館ができたのは昭和53年のこと。医学部創立30周年記念事業の一環として、医学部医学科同窓会「広仁会」の寄付などを基に設置されました。



広島大学医学部の歴史コーナーには懐かしい写真、貴重な写真が並ぶ。



医学資料館南側の木は、医学の父と言われるギリシアのヒポクラテスの故郷から贈られたもの。

建物は、広島大学医学部が呉市から現在地に移転した当時から校舎として使っていた赤レンガ造の11号館を改装したもの。大正4年に建てられてから被爆にも耐えてきました。

その後、附属病院の建て替えに伴って、平成12年3月に現在地に移転。この時も、傷みの少ない東外壁を中心に被爆したレンガや石の一部を再利用して建設されています。

昨年秋にオープンしたばかりの新しい外来診療棟、そして向かいには赤レンガの医学資料館。広島大学医学部の先進性と伝統をシンボライズする2つの建物です。

## 広島医学の歴史 その本流を俯瞰する

現代医学は、ヒポクラテス以来数千年の時の流れの中で人間が少しずつ積み上げてきた経験と技術の上に成り立ち、さらに未来に向けて動き続けています。自分たちがその大きな流れの中に立っていることを認識することが、広島大学で学ぶ医学生の一歩と言えるかもしれません。その歴史認識の中から、医学にたずさわる者としての倫理観も培われていきます。

広島大学医学部医学資料館は、広島の医学の歴史に触れる場所。江戸時代の西洋医学導入期から現代の広島大学医学部へ。脈々と流れ続ける広島県の医の本流——医学資料館の展示物は、それを教えてくれます。



昨年秋、原爆投下時に破壊されて川底に沈んだ旧産業奨励館(原爆ドーム)の石が、広島大学医学部大学院生によって引き上げられた。医学資料館ロビーに展示予定。